

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ホワイトプリズンⅢ

汚辱の影に牝奴隷の肢体は輝く

小説 黄 支 亮

挿絵 カワギシケイタロウ

第一章 .. 地下牢にて

007

第二章 .. 盪惑の園

066

第三章 .. 事実

111

第四章 .. 魔女裁判

188

登場人物紹介

Characters



フィオ

本編主人公。今は亡き母親の再婚に伴ってクレイホーン男爵の義理の息子となる。魔法学校に通う学生。

ポーラ

フィオの血の繋がらない叔母。クレイホーン男爵とは腹違いの妹になる。性に対しては奔放な意識を持つ女性。

リディア

フィオの幼なじみで騎士見習いの少女。フィオたちを助けようとして事件に巻き込まれる。

マレーネ

辺境伯の令嬢。黒い髪の美女。クレイホーン男爵にさらわれてきた。

クレイホーン男爵

辺境の虎と恐れられる武人。フィオの義理の父親にして養育者。

エリス

フィオの師匠で魔法学校の教師。竹を割ったような性格の女性。

ヒルの親玉。兵士が二人がかりで持ち出してきたそれは、びくっびくっとならぬと脈動していた。長い筒状の生き物は、頭の部分に——おそらく頭であらう——五本の触手がついており、それが、にゆるつにゆるつと伸び縮みしていた。そして、それを見たマレーネが、目を見開いて絶叫した。

「うああっ、いや、それは、それは駄目、駄目ーっ」

黒髪の美女は半開きになって両腿をぴたりと閉ざして泣いた。伯爵令嬢は胸が悪くなるようなその生物を知っているようであった。

「あれはいつたい……」

フィオは呟くようにして言った。マレーネはその身を震わせて言った。

「あれは……あれは……ベルヴァ虫……」

「ベルヴァ虫？」

フィオは聞いたことのない名前に首を傾げたが、ポーラはその名前を知っていたようである。

「あれが……」

ポーラはのたうつ怪物を見てかすれた声を出した。

「女の胎内に卵を産みつける寄生虫……」

嫌悪の色を面に表すポーラの目の前で、怪物の五本の角が広がり、その中心が上下にく

ぐつと開いた。口とおぼしき部分からはねつとりとした透明な体液がずると垂れる。

「あれが……」

ポーラは絶望した。何が起こるかはもう明らかであった。リディアは失意のあまりぐつたりしている。

「そのほうたちはこの虫を受け入れるのだ……」

男爵の言葉にマレーネは聞きたくないといった具合に顔を背けた。

「……そ、そんな」

ポーラは、怪物の生態を知っているのだろう。神殿に籍を置いたことのあるポーラはまわりが思うよりもずっと博識であった。そして知識があつたからこそ絶望も深かった。

「虫の卵はそのほうたちの中ですぐに孵る……。幼虫はそのほうたちの中で激しく暴れるであろう。それを逃れるには自ら卵をひり出すよりほかない……」

フィオは絶句した。今や過酷すぎる運命が女奴隷たちに訪れようとしていた。

「いや、いやですっ」

マレーネは髪を振り乱して泣き叫んだ。垂れぎみの乳房が震え、少年の目の前で大きめの乳輪が円を描くようにしてくるくと回転した。だが。マレーネの懇願は最初から黙殺された。

「虫の卵が孵化するよりも先に卵をひり出すことができたら、その時は交合うことを許そ

う……」

マレーネはいまだにいやいやをしていたが、ポーラは唇を真一文字にして沈黙した。試練を受けてでも若い牡の精を受け入れたい。女は決意しなければならなかったのだ。リディアは現実があまりにも酷すぎてすでに状況を把握しきれていない。

「虫を……」

男爵が宣告した。兵士たちの手から寄生虫が放たれた。紫色をしたぶよぶよの生き物はフィオが漬け込まれている浴槽の中に滑り込んだ。

「うう……」

少年は気味悪そうにそれを眺める。怪異は繊毛をぴりぴりと蠢かせてフィオのまわりをゆっくりと泳ぎ回っていたが、やがて、浴槽内の人物が産卵に適さない相手だと感知したのだろう。全裸で股間を怒張させたフィオのもとから離れていった。

「ああ、駄目ーっ、来ないで、来ないで、お願いーっ」

マレーネは絶叫したが、紫色をしたぶよぶよはついに自分が入り込み卵を産みつける相手を発見してしまった。

「いやーっ」

ようやく状況を理解したのだろう。リディアは悲鳴を上げた。あの紫色をした管状の生き物が股間に……。

「あ、あわ……」

ポーラの唇が奇妙に震えた。初めての関係を持つて以後、少年が何度も吸った唇。そこから意味不明な呻きが漏れた。紫の虫は、湯の中をするつと泳ぐと、裸の女たちに向かつていく。寄生虫は女たちが発する牝の臭気を敏感に感じとっているのだろう。そして、恐ろしくもはしたないことがついに起こってしまった。

「だめっ、来ないでっ、来ないでーっ」

ポーラは気が違ったように叫んだ。不細工に肉のはみ出した美女の性器からとろっと流れ出た牝のエキスに怪物は明らかに反応を示していた。

「う、ううっ、うああーっ」

汚れた生き物。気味の悪い下等な生物。見ただけでも吐き気をもよおす寄生虫に卵を産みつけられる恐怖。そして、その幼虫を膈内で孵化させることへの嫌悪。すでに豚による獣姦を経験しているポーラにとっても、紫の軟体生物を胎内に挿入されることは悪夢に近いものがあつた。

「いやよーっ」

成熟した牝奴隷が必死になつて最後の抵抗を試みる。全身を強ばらせ、膝を必死に閉じてくるぶしのあたりをうろうろと泳ぎ回っている怪物の侵入を拒もうとする。

「だめ、フィオの目の前ではっ！」

ポーラは身を反らして絶叫した。女の豊かな乳房が縦にぶるんぶるんと振り回され黒ずんだ乳首が冬風に吹かれる姫リングゴのようにぐりぐりと宙を舞った。だが、女の抵抗もそこまでであった。兵士の一人がポーラの腿に手を回した。そしてそのまま女を抱き上げた。「こんな格好いやーっ」

ポーラは屈辱に首を奇妙に曲げたまま鳴いた。ポーラは今や幼女が大人に促されて用を足すように、股を大きく広げ爪先を前に投げ出すような体勢で固定されていた。それも若い義理の甥のすぐ目の前で。

ひくくっ……。

フィオは叔母の股間に咲き誇る肉薔薇がひくくついたことを見逃さなかった。あまりにも無残な、あまりにも美しい刑罰。自分の愛する女性を受ける恥辱を目の前にしながらフィオは情けなくもペニスを硬く怒張させる。そして、ついに悪夢の一瞬、あつてはならない悲劇がポーラの熟れた秘肉に訪れた。紫の虫が浴槽からぐぐつと這いずり出ると長い首をポーラのかばつと開かれた腿の中心に伸ばしたのである。

「う、うう……」

ポーラの目に驚愕の色が浮かんだ。唯一愛する男の前で、神聖な秘所を貫かれる。見たくない光景、考えたくもないシーンである。だが、服従の媚薬によって肉体を改造されてしまった女は、どうしても自分の股間から目を離すことができないのだ。



「う、うああーっ」

ポーラの悲鳴が響き、隣にいたマレーネは顔を真つ赤にしたまま目を背けた。一方、若いリディアは自分の身にも起こる破廉恥刑からどうしても目が離せないでいる。少女の顔には嫌悪とは別の何か小さな期待のような色があつた。

紫の生き物は五本の小さな突起がついた頭をポーラの陰毛の下へと滑り込ませた。悲痛な牝の悲鳴が上がった。汚らわしい生き物はその五本の突起を長く伸ばして、ポーラの茂みの中を探り始める。この牝は十分に濡れているか、卵を産みつけるのに十分に熟れているのか。寄生虫の突起がポーラのぶざまに飛び出した収まりの悪い肉襷をなぞるようにして蠢く。

——まだ濡れが足りない……。

虫はそのように判断したのだろうか。不意に五本の突起がわさわさ動き出した。そのうちの三本がポーラの肉の裂け目の前のほうに集まり始めた。大きく発達した肉芽。寄生虫はポーラの身体を貪欲な牝に一瞬で変えてしまう快樂のスイッチに突起を向けたのだ。女の身体が硬直した。ポーラの目は固く閉ざされ、そして唇には無意味に力が入る。美女の唇がわなわなと震える。

「……蜜を出すのだ」

男爵は仮面の下から、年の離れた妹の恥知らずな姿を満足そうに見ている。狂った男爵

はもはや情愛などという感情を抱くこともないのだろうか。

「お、おおっ……」

ポーラの喉に詰まっていた吐息がようやく吐き出された。虫は触手をまるで人間の指のように使つて器用に美女の陰核を刺激する。挟み込むようにして揉み、くりくりと絡みついて締め上げる。女の敏感な部位は驚くほど充血して硬くしこつていく。

「ポーラさん……」

フィオは言った。若く美しい義理の叔母は悲しい視線をフィオに送った。

——ごめんなさい、こんなものに感じてしまつて……。

美女の視線は確かに許しを乞うていた。二人の悲しい視線での会話を虫は感じとつていたのだろうか。不意にポーラのクリトリスへのマッサージが激しくなった。

「あ、うああーっ、あーっ！」

女たちは淫薬によつて肉体を完全に改造されていた。ポーラもマレーネもリディアも最初に受け入れた精の持ち主となるフィオに犯される時には普通のオルガの数倍から十数倍、場合によつては数十倍の悦びを得られるようになっていたのだ。だが、だからといって、フィオ以外の人間や動物、あるいは自慰などでは感じないという身体になつてしまつたわけではないのである。責められれば女たちは絶頂を樂しむことができる。だが、いくつものアクメの中でフィオと交合し、体液を膣内につつぷり注がれる快感があまりにも強烈で

あり、図抜けていたというだけのことである。最高の主人の前でもっとも恥ずかしい姿を開陳させられて、虫責めをされるといふことは、もしも、その場にいるのがフィオと女たちだけであれば、これほど素晴らしい遊戯はなかったのではないか。

「ああ、あああつ」

虫の突起のうち二本がポーラの肉襞の先端に入り込んだ。そして、フィオに見せつけるようにして淫肉を広げた。湿って光る大粒の肉真珠が寒そうに震えている。虫はその肉色をした宝石に長い突起を絡ませる。大粒の真珠がくりくりと締め上げられ、揉みほぐされていく。

「あ、ああーっ！」

ポーラの身体からはすでにほとばしるようにして汗が流れ出ている。牝奴隷の淫らな肉体は確かに責め苦を受け入れ、それを快感と感じているのだ。

「はっ、はっ、はっ……」

ポーラの息づかいが鼓動に合わせるようにしてリズムカルになる。女の身体は虫の動きと少年の刺すような眼差しに酔いしれていく。女がどれほど酔っているかは、彼女の肉壺から溢れ出たヨーグルトにも似た濃厚なエキスが雄弁に物語っていた。恥じ知らずで卑猥な女奴隷の肉壺の中心、花弁の中央に位置する小さな肉穴、子宮への小径から零れた女の涙はそのまま陰毛をべったりと濡らし、肛門をとろとろと湿らせ、尻肉を伝って浴室の床

に糸を引いて垂れていた。

「フィ、フィオ……」

ポーラはうつすらと目を開けて思い人の名を呼んだ。フィオは黙ってうなずいた。

——感じるならばそれでいいんだよ……。

どうしようもないほどに低劣になってしまった女のことを少年は認めるしかなかった。それが愛だと少年は感じていた。

と。ついに最終局面が訪れようとしていた。寄生虫は女の肉壺が十分に暖まり、産卵に適した状態になったと判断したのだ。快感のスイッチを押され、大きく深く広がったポーラの膺は、寄生虫の頭を十分に受け入れることができるようになっていた。

にゅぷぷぷ……。

湿った空気が女の淫肉から漏れた。

「うううあ、ああーっ！ はああっ」

兵士の腕の中でポーラはばたばたと腰を前後左右に揺すった。いやらしい虫は乱暴にぐりぐりと美女の中へと入り込んでいく。

「ああーっ、ああーっ、うああーっ！」

ポーラは泣き叫んだ。そして仲間への酷い異物責めに他の二人の牝奴隷の肉体が奇妙な動きを見せた。

——なんてきれいなんだ。

見事な女性器に少年の心は踊った。このようなことができるのであれば、もう自由などいらぬのではないか。フィオは頭の片隅でそのようなことを一瞬だけ思い、それから慌てて首を振ったものである。

——駄目だ。みんな自由になるんだ。

自由になって、誰憚ることなく自分たちの悦びの徑みちを自分たちの意志と肉体で切り開く。フィオは女たちとそのように約束したのだ。

「いくよ……」

フィオはマレーネに言った。ポーラとリディアも自分たちが何をしなければならぬかをちゃんと弁えている。二人の牝奴隷は、誰に言われたわけでもないのに左右からマレーネを挟み込むようにして床の上に横たわった。そして、そのまま伯爵令嬢の腕を二人で万歳をさせるようにして開かせた。

白い肌の美女は一糸まとわぬ肉体を主の前に晒していた。フィオはしばらくマレーネの裸体を目で楽しんでいたが、やがてゆっくりと女の腰に自分の下腹部を押しつけた。

「は、早く……」

マレーネは甘い声でねだった。貴婦人は低劣ではしたくない淫売に成り下がっていた。否、淫売のほうがまだましであったかもしれない。マレーネは金のためではなく、純粹な快感

のために自らの湿った秘肉を男の欲望の前に突き出してゐるのだ。フィオはそんなマレーネの下半身を鎮めるべく、どす黒くなったペニスの先端でマレーネの肉百合に触れた。

「う、ううーん！」

ただの一擦り。ペニスの先端が割れ目の上をなぞっただけでマレーネは身体をぶるぶると震わせた。男爵によつて責めさいなまれて極限まで敏感にさせられてしまった白い裸体はほんの少しの刺激に感電したように反応を示す。少年は美女の苦しい道のりを慰めねぎらうようにして、女の茂みの上をゆっくりとペニスの先端で擦る。

「は、は、は……」

粘膜と粘膜が軟らかく触れ合う感触にマレーネの吐息が熱くなる。そして、それを煽るようにしてマレーネの右の乳首をリディアが、左の乳首をポーラが吸い、舐め上げる。

「ああーっ！」

左右から乳房を揉まれ、吸い尽くされ、股間はペニスによつて擦られる。美女は子宮から盛り上がってくる痛みにも似た熱い感覚に酔いしれている。そして。

「ずいゆっ……」

肉が擦れあう音が確かにその場に響いた。マレーネの目が中空を泳ぎ、女の赤い唇がまるで釣り上げられた鯉のように苦しげにはくばくばとなった。少年はいよいよ女体の突貫にかかったのである。まったく手入れのなされていない黒い恥毛の森の中心に隠れた肉色の

女陰。フィオのペニスがゆっくりとその中へと入っていく。白いエキスで湿った肉の扉がこじ開けられ、そして、一気に肉百合が貫かれていく。

「ああ、入って、入ってきた！ あれが、あれがああつ」

マレーネは涎を垂れ流したまま叫んだ。黒髪の美女ははしたなくもすべての感覚を股間の一点に集中させている。三日も我慢を強いられた究極の快楽。淫薬で改造された肉体には一日として欠かすことのできない肉の糧。待望の肉の愉悅でマレーネの膣の中が満たされていく。

「ううっ、ああーっ！」

狂った獣は黒い髪を振り乱し、股間の剛毛を逆立てて鳴いた。抑えようにも抑えきれない牝獣の叫び。少年はマレーネを巧みに責め上げていく。

「いくよ……」

フィオは言った。少年はそのままゆっくりと腰を前後に揺する。女の淫肉の中で肉のコネ棒がリズムカルに運動する。褻の奥の部分をほじくられたマレーネは息もできないほどに狂喜している。

「……っ」

美女は涙を流して、声にならない悲鳴を上げた。美しい妻の反応に少年はさらに無慈悲に腰を動かす。深く突き、深く突き、浅く突く。右の膣壁をえぐり、もう一度右の肉壁を

擦り、さらにもう一度突くと思わせ、肉の一撃に歯を食いしばって構えるマレーネの虚をつくようにして左の壁を責める。心地よい湿った肉の擦れあう音が暗い地下の中に響く。

「マレーネさん、気持ちいい？」

フィオは美女に訊ねた。少年は女が満足しているかということがとにかく気にかかるのだ。少年の問いにマレーネはすぐに答えた。

「ああっ、ああーっ！」

女は絶叫すると藁の上で激しく首を横に振った。もっとも、その首の動きは『気持ちよくない』という意思表示ではなかった。逆である。

「ああ、ああっ、んああーっ」

白い肌を震わせて美女は悲鳴を上げた。マレーネの左右のまなじりからは涙が溢れていた。苦痛の涙ではない。抑えることのできない随喜の涙である。法悦の極み。女は普通の女では絶対に辿り着くことのできない、快感の極北に立とうとしていた。

「ああっ、そこは、そこはーっ」

黒髪のと畜は喉の奥から叫んだ。少年のペニスの返しの部分が意地悪く女の膣口から僅かの部位、喜びを感じる神経が集まった部位を攻撃し始めたのである。

肉鉗の返しの部分がマレーネの膣肉の敏感な部分にひっかかり、女の子宮を恐ろしいほど残酷に刺激するのだ。

「お願あつ」

マレーネの悲鳴はすすり泣きになった。つい先日まで処女であつたマレーネは、そのよ
うな快感のツボが自分の中に潜んでいたことすら気がつかなかつたのだ。

——何なの、この気持ちは……。

悦びのツボ、クリトリスに匹敵する女のエリアを開拓されたマレーネは、自分の肉体の
反応に最初のうちは戸惑っていたようである。悦びを感じる部位は多ければ多いほどよい
のだから本来的には。けれど、男爵のもとに囚われている彼女には、それを素直に喜べない
ころがあつた。狂つた男爵の刑罰のよい材料とされるのが目に見えていたからである。

「もつとそこを、そこを……」

マレーネは嗚咽し、肉の調べに没頭している。フィオははしたない妻を罰するようにし
て彼女の肉芽に指を伸ばした。

くりくり……。

硬く勃起した陰核を親指と人差し指の間で転がされ、無言のままのけぞつた美女はその
際に床の上に軽く後頭部を打ちつけた。もつとも藁が敷き詰められた床の上では痛みもさ
ほどのものではなかつただろうが。

「そこ、だめ、そこは、ああーっ」

爪先一本で快樂の大風に耐えていたマレーネにとっては、フィオの悪戯心は完全にとど



めの一撃となった。

「だめ、そんなにそこを揉まないでっ、だめっ、本当に、本当にだめーっ」

フィオはしかしマレーネの哀願を聞かなかつた。ポーラやリディアの動きも止まることはない。

「ああ、ああ、ひいっ！」

素晴らしい虹のような歓喜がマレーネの肉体を股間から頭頂部へと駆けぬけていく。女の頭まで上りつめた芳しい悦びは頭蓋のところまで跳ね返り、また膺へと舞い戻ってくる。膺に戻ってきた肉の悦びは少年のペニスに突かれて再び頭頂へと飛翔する。

全身を上へ下へと行きつ戻りつする快樂のシーソーに黒髪の美女は四肢が裂けて飛び散らんばかりに悶えている。

「あっ、あっ、ああーっ！　いくっ、いくっ、いってしまっ！　うあひいい」

感じやすくなった美女の肉体は少年の一突きごとに強烈なアクメに達している。

——こうしてもっともっとマレーネさんを楽しんでいたい。

フィオは自分の下で汗まみれになって悦び悶える美女を見ながらそう思った。こうやって何時間もマレーネの肉体を責め、快感の海にたゆたうことができればどんなに素晴らしいだろう。実際、フィオにもマレーネにもそれができるのだ。精力的には何の問題もない。問題は、二人の外にあった。

——早くしないと。

邪悪な義父の部下がいつやってくるか分からないのだ。しかも、フィオには満足させるべき細君がまだ二人もいる。彼女たちの身体にもそれ相応のことをしてやらなければならぬ。

——邪魔が来ないうちに射精してしまったほうがよい。

少年は後ろ髪を引かれる思いでそう判断したのだ。

——時間があるようならば、その時にもう一度交わればよい。

とりあえずの処置である。

「マレーネさん、出すよ……」

少年は自分の下になる美女に優しく笑いかけた。牝獣は聞いていなかった。固く目を閉じ、高く上げた両手を固く握りしめて、津波のように襲ってくる悦びの波状攻撃と戦っている。そして、少年は少しずつ腰の動きを速めていく。粘膜同士が擦れあい、芳しい濃厚な牝の汁が床にまで零れている。四人の淫獣たちの汗が混じりあい、熱い欲望の炎がマレーネの膈内で破裂する。

——出る……。

少年のペニスの先端から白い精がほとばしり出た。

「ぐあああ、ああーっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>